

近世延岡藩における「帳外」について

The "Chougai" of the Nobeoka Clan in Early Modern Era

大賀 郁夫

キーワード

追払 帳外 立帰 窃盗 贋札

目次

はじめに

一 延岡藩の帳外

(一) 帳外の創出

(二) 帳外と立帰り

二 事件と帳外

事例一 無宿人次郎右衛門・藤助・安五郎窃盗一件

事例二 高千穂鞍岡村帳外六弥窃盗一件

事例三 宮崎郡花ヶ嶋町帳外順蔵窃盗一件

事例四 神門村帳外友吉贋札一件

事例五 高千穂上野村帳外角右衛門立帰り一件

事例六 佐伯領津久見村帳外弥右衛門窃盗一件

事例七 佐土原領帳外武右衛門贋札一件

事例八 帳外廣吉窃盗一件

むすびにかえて

近世地域社会においては、共同体内の治安や秩序を乱しかねない不行跡者Ⅱ「徒者」は勘当・久離・帳外にされ、集団から排除されていた。無宿Ⅱ帳外は、幕藩制の編成原理とは異なる次元での身分に収斂しきれない社会的関係の存在(身分的周縁)であった。帳外たちは再三「立帰」りを繰り返す場合が少なくなく、それがさらなる治安悪化につながるなど深刻な問題になっていた。本稿では、領外に放逐された帳外たちの動向を追ひ、彼らがどのような生業に携わり、生活を維持していたのかについて、寛政Ⅱ文政期の八件の事例をもとに具体的に明らかにした。八件のうち窃盗五件、贋作作り二件、その他一件である。

帳外たちは領外にも強固なネットワークを持ち、帳外と承知で止宿させる仲間もいた。帳外たちはあちこちで日雇い稼ぎに従事し、なかには貯えた小銭をもとに山産物と海産物を「品替」するなど小商いをする者もいたが、窃盗や贋札作りに手を出して捕縛される者が多かった。盗んだものを各地で売り払い、元手が無くなるとまた盗みを働くというパターンを繰り返した。

罪人を領外に放逐することで領内の治安維持を図るには限界があり、藩は共同体内に閉じ込めて監視するようになっていく。

はじめに

一九九〇年の「身分的周縁」研究会の発足以来、近世史研究において身分的周縁の視点から様々な研究が行われてきた。^① 制度化された身分制の裏側に、幕藩制の編成原理とは異なる次元での身分に収斂しきれない社会的関係の存在（身分的周縁）に着目し、「身分的周縁論」は近世社会の社会構造全体の捉え方に関わるものに展開してきた。^② 例えば目明しを接点・媒介として、異なる社会集団間や異なる性格の存在間のネットワークが明らかになっている。^③

近世社会においては、共同体内の治安や秩序を乱しかねない不行跡者Ⅱ「徒者」を勘当・久離・帳外にして、集団から排除したことは周知の通りである。^④ 共同体内では日常的に住民相互による「人品」監察がなされており、「後難」から組織を守るために「徒者」は人別帳から除外されて帳外となったのである。^⑤ 帳外は『地方凡例録下巻』^⑥によれば、「其者常々不行跡にて、親類・村役人種々異見を差加へても悪事を止めず、外より度々難題申来り候に付、村方宗門帳に加へ置ては、如何様の災難出来すべきも計り難きゆへに、親類村役人申談じ、地頭へ願ひ帳外致し村方を追出すことあり」と定義されている。帳外は、村方の共同体としての論理と、公儀の人民支配の論理の合意の上に成り立つものであった。^⑦

共同体から放逐された帳外たちは、再三「立帰」りを繰り返す場合が少なくなく、それがさらなる治安悪化につながるなど深刻な問題になっていた。彼らが「立帰」るのは、強い望郷の念もあるだろ

うが、少なくともその場所に何らかの生きる糧があり、何とか生活できたからである。また、同じ境遇にある仲間やそのネットワークの存在が指摘されている。^⑧ 藩は常々帳外や他所者への宿貸しを厳禁していたが、禁を犯して止宿させ処罰される例は枚挙に暇がない。領外の帳外が立ち帰り、領内で生活の糧を得、どうにか生きていく条件は満たされていたといえる。

本稿では、無宿Ⅱ帳外をとりあげ、領内追放となった帳外たちがどのような生業に携わり、生活を維持していたのかについて、具体的に明らかにするを課題とする。対象とするのは文化Ⅱ文政期の日向延岡藩（表高七万石・譜代内藤氏）である。藩領域は城附臼杵郡とその西方に続く高千穂郷、飛地宮崎郡と豊後大分・速見・国東三郡である。同藩は、北部は佐伯・竹田両藩、西部は肥後熊本藩および幕領で人吉藩預地の椎葉山、南部は米良山と幕領と藩境を接する。使用する史料は、特に断らない限り藩庁御用部屋日記「萬覧書」（明治大学博物館所蔵内藤家文書）である。

一 延岡藩の帳外

(一) 帳外の創出

共同体から放逐された「帳外」となるには、大きく分けて「悪事有之帳外」と「出奔帳外」があった。^⑨ 以下それぞれみていこう。

① 「悪事有之帳外」

事例一 長井村連臺寺家内国右衛門の場合

此者儀先年不埒之筋有之、村方帳外ニ相成候処、去ル亥年帰村

御免被成、其砌方黒木村之内江太平山仕入罷在（後略）⁽¹⁰⁾

国右衛門の「不埒」の内容は不明であるが、罪を得て村方帳外になった例である。なお国右衛門は、後亥年に大赦により帰村が許されている。

事例二 宮崎生目村庄屋善三郎下人源蔵の場合

一宮崎生目村庄屋善三郎下人源蔵儀、兼而不人品ニ付度々異見等仕候処相用不申候付、此度暇差遣村方追払申度旨、依之村帳面御除被成下候様仕度奉願旨、親類・年寄・庄屋連印を以願出候段、郡奉行書面差出申聞候付、各江茂申談願之通承届可然与有之候付、其段申渡候様郡奉行江申談書面差戻ス⁽¹¹⁾

宮崎郡生目村庄屋善三郎下人の源蔵は、以前より不人品で度々異見してきたが聞き入れないので、暇を出して村方から追払いたい。ついでには村人別帳から除いてくれるよう親類・年寄・庄屋らが連印して願出て、藩はこれを認めている。

②「出奔帳外」

事例三 恒富村龍治の場合

龍治先年出奔仕候砌、先々大庄屋染矢嘉八より御他領ニ而不埒之儀出来候而者不相成、帳外ニ可仕（後略）⁽¹²⁾

恒富村龍治が出奔した時に、大庄屋染矢嘉八により龍治が他領で不埒なことをしてかすことを危惧して帳外にしたとする。大庄屋の権限で防犯対策として事前に帳外にしたのである。

事例四 神門村帳外友吉の場合

此者儀、先年出奔仕帳外ニ相成居候処、去ル巳年御料児湯郡右松村之内新町江罷在候帳外大吉与申合、竹田御領通用之銀札并

当所通用之振手形贋札拵（後略）⁽¹³⁾

神門村友吉が先年出奔して帳外になり、去る巳年に御料児湯郡右松村新町の帳外大吉と、竹田領銀札と当領振手形の贋札を作ったというもので、理由は不明でも居村を出奔すれば帳外になったのである。

事例五 恒富村平原門加地次郎の場合

一恒富村平原門勝次郎儀、妻倅召連去ル子年出奔に付帳外ニ被仰付置候処、親類共方歎之筋も有之、出奔之節惡事等仕候ものニ無御座、全困窮ニ而村方立出候ものニ付、帰村御免被成下候様村役人願出候段、郡奉行書面差出申聞候ニ付各江茂申談、各別之以御憐愍此度帰村御免被成、御城内出入御差留被成、以来万端相慎致渡世候様為申付可然与各遂相談、其段申渡候様左之通郡奉行江申談、尤願書者留置候事⁽¹⁴⁾

恒富村平原門の勝次郎は、妻と倅半次郎を連れて子年に出奔し帳外にされていたが、親類たちの歎願もあり、出奔時に悪事をしたわけでもないのに帰村を許してくれるよう村役人が願出たというものである。勝次郎の出奔の原因は「全困窮」であったため、藩は帰村を認めている。

帳外は村方だけに見られたものではない。町方の事例を示そう。

乍恐以書付奉願上候覚

北町佐伯屋半次郎義、兼而不人品ニ而商売方等も不仕、度々酒狂之上口論等仕、度々御上之御手当も被仰付候儀ニ付、私共方異見差加へ候義者数度之事起候ニ御座候得共、何様人品不相直此上如何様之義仕出、御上之御苦勞可可能成ほと難計奉存候間、乍恐町払帳外被為仰付被下候様奉願上候、此段宜被仰上可被下

候、奉願上候、以上

文政三辰年

十二月

北町佐伯屋半次郎親類

清高嶋大坂屋 金兵衛 印

柳沢町佐伯屋 勝次郎 印

右半次郎五人組合

勿之助

他出ニ付印形不仕候

豊後屋 万次郎 印

菱屋 傳次郎 印

豊後屋 秀治 印

右五人組合頭近江屋 印

徳兵衛

河野勘兵衛殿

林田新助殿

河野保三郎殿

右半次郎義、度々私共方も異見差加エ候得共不取用、前段親類

五人組共奉願候通相違之義無御座候間、乍恐願之通町払帳外被

為御聞届被下候様奉願上候、以上

右同日 北町乙名 河野保三郎 印

同 林田新助 印

同別当 河野勘兵衛 印

月番町年寄 山村治左衛門印

町御奉行所

右書面町奉行差出申聞候ニ付各江も申談、願之通被仰付可

然与各遂相談、其段申渡候様町奉行江申談願書差戻ス⁽¹⁵⁾

城下北町佐伯屋半次郎は、予てより品行が悪く商売もせず、度々酒に酔って口論等をして藩から捕縛を命じられたりもしたので、商人仲間が何度も異見したが素行は改まらなかった。この後どのような悪事をしてか、藩に厄介をかけるか分からないので、町払いの上帳外にしてほしいと願出ているのである。

このように、町方・在方を問わず、主に①出奔、②罪科、③防犯などの理由で共同体から放逐され、帳外になったことがわかる。特に③防犯を名目に、親類・組合・町村役人・組合仲間などからの陳情、また村役人の独断でも帳外にすることができたのである。⁽¹⁶⁾

（二）帳外と立帰り

犯罪や出奔で帳外となった者たちが、領内へ立帰る例は枚挙に暇が無い。城下紺屋町帳外人弥次郎の例を示そう。

右之者儀、御領内江立帰不届之筋有之付、岡富入牢被仰付置候処、格別之御用捨ヲ以入墨致、板田橋袂ニ而三日曝之上五十杖為打、御領内追払被仰付、肥前長崎徘徊御差留被成候⁽¹⁷⁾

領内へ立帰った弥次郎は、入墨して板田橋袂に三日曝された上、五〇杖敲かれて領内追払となっている。

内藤氏が延岡に入封して間もない宝暦四（一七五四）年三月、領内の治安悪化に対して郡方は次のような達書を出している。

近年風俗不宜村方茂有之趣相聞候間、此度左之通被仰付可然与奉存候

一村方江年々申渡候御條目之趣、并村方被仰出候五人組前書之趣

相守可申之所、心得違之者茂間々有之段粗相聞不埒之至ニ候、別而博奕諸勝負致候もの数多有之趣相聞、風俗不宜者茂相見候、此已後庄屋弁指者不及申、五人組為仲間相互ニ致吟味、御法度之趣急度相守可申事

一他領者往還筋江相掛り一宿為致候儀者格別、二夜与宿賃候儀者可為無用候、若謂茂有之候ハ、庄屋・五人組江相届、村役人方支配代官所江申達之上可請差図候、惣而不審成者村方ニ差置申間敷候、尤往還筋ニ無之村方ハ一夜たりとも宿賃申間敷事

一御先代方之帳外もの又者欠落者、村方江立帰徘徊致候者有之趣相聞、不届至極ニ候、右躰之者於隱置者其身者不及申、親類・五人組・村役人迄吟味之上、急度被仰付方有之候間、其段相心得無油断可致吟味事

右之趣此度被仰出候間、村々小百姓召仕等迄与行届候様村役人方念を入可申渡候、若相背候もの於有之者、急度越度ニ可被仰付候、以上¹⁸

往還筋では他領者には二泊以上宿を貸さないこと、もし理由がある場合は村役人や代官に届けて差図を得ること、不審者は差置かず往還筋でない村方は一宿もさせてはならないことを厳達している。近年博奕・諸勝負をする者が多くみられるなどの風紀の乱れは、先代牧野氏時代からの帳外や欠落者らが、村方に立帰って徘徊するからだと断じている。実際領内追払者や勘当・帳外人たちが、領内に立帰って徘徊し、神事祭礼や縁日等混雑する場所で博奕をしたりすることが多々見られたのである。

さらに同七年三月、藩は郷中・町方・門前へ次のような触書を出

している。

郡方・宗門方江

一御領内追払者并勘当・帳外人之類、我儘ニ御領内江立帰徘徊致候趣粗相聞エ候、兼而被仰出候通見遁聞遁不致訴出可申候、村役人始村中之者共、町役人始町中之者共不届至極候

一他所者猥ニ宿致候儀、兼而御停止之處、是又近年不埒之儀相聞エ候、前々御制禁之通堅相守候様急度可申付候

一神事・祭礼又は入仏・開帳・縁日等ニ而人集致候節、於辻々博奕・ちよほいち等有之趣相聞エ候付、右躰之もの見掛り候ハ、召捕注進可致旨、去年中茂被仰付候処、今以相止兼候趣粗相聞エ不届至極候、以来於相背者兼而御定之通急度可被仰付候間、末々之もの迄堅相守候様可申付候

右之通此度被仰出候間、郷中江・町方寺社并門前江可被相触候、以上¹⁹

このように他領者や帳外者を、領内の治安を悪化させる元凶だと藩はみていたのである。

領内を追放された帳外たちが再び領内へ立帰るのは、望郷の念や郷愁ばかりではなく、彼らを必要とする需要があったからである。その理由のひとつが奉公人の不足である。

宝暦十二年三月、藩は以下のような触を町に出している。

一近年男女奉公人至而払底ニ相成、御家中末々迄差支之趣相聞候付、御城附村々方御中間ニ御抱被成候上、御家中召抱候者江御配被成可然与遂相談、其段郡方江申渡吟味為致候処、当時田畑江取掛り候故在々ニ茂奉公望候もの無之、其上未進中間ニ可罷

出者も無之趣申達候、最早召仕出代りの砌、甚御家中差支ニ茂相成候ニ付、町方之者之内奉公人請負候者茂可有之哉、内々吟味致候様寺社奉行江申渡候処、博勞町長岡嘉平次義御家中奉公人并御分日雇人等引請申度旨、最男女給銀日雇賃左之願之通被仰付候者、他所者等ニ而茂引受奉公人差出可申旨相願候段寺社奉行申達候、前段之通在方茂近年打続作方宜候故、暮能候而奉公人少相成候儀与相見、甚召抱候者共差支ニ相成候間、他所者たりとも嘉平次江奉公人之宿為致可然与有之、給銀等左之附紙之通ニ而請負被仰付候段申渡候様寺社方江申渡願書戻

覚

一 老年季男奉公

此給銀百目

内五匁判賃

一同女奉公

此給銀九拾目

内五匁判賃

一 一日雇老入ニ付

此賃銀老匁六分

内老分同断

右之通被仰付被下候ハ、追々奉公人・日雇人共引受出精仕差出可申候、最奉公人餘計御座候節者奉公人無御座候故、右之給金ニ而御抱被遊候者奉公人茂可有御座与奉存候、右請書差上申候、以上

午三月

博勞町

町御奉行所

永岡嘉平次印

これに対して藩は附紙で、

男給銀 上百目

下九拾目

女給銀 上九拾目 下八拾目

右之通請負候様可被申渡候⁽²⁰⁾

という指示を出している。男女奉公人の払底を理由に、藩は城下博勞町の長岡嘉平次を奉公人請負いに指定して、家中奉公人や領内の日雇い人などを斡旋させているが、「他所者たりとも」嘉平次に依頼すれば奉公を認めている点に注目したい。さらに次のように言う。

郡方・町方江

此度不限男女ニ他所者奉公人宿、博勞町長岡嘉平次江被仰付候、御家中并在町共他領もの召抱候ハ、右之者江対談之上召抱候様可致候、前々被仰出茂有之帳外之者、宿致候義堅御法度ニ候ヘ共、万一人足主無之御領内徘徊之者は、右嘉平次方方吟味茂可有之候間、其旨可相心得候

一 御分日雇入口是又一圓ニ嘉平次江被仰付候間、日雇稼之者は右之者方江対談之上可能出候

右之通被仰付候間、在方町方江可被相触候、以上⁽²¹⁾

帳外者への宿貸しは法度であるが、嘉平次が吟味した上で奉公や日雇いを認めるというものである。これでは帳外となった者が領内に立帰ることを事実上認めたも同然である。

しかし、追放された帳外人が再度立帰り、奉公人や日雇人として真面目に働けば問題はないが、皆がそうするとは限らない。例えば文化十年六月、佐伯領帳外の豊八が銀手形の贋札を作り使用したとして、入墨して三〇杖敲き・三日曝しのうえ領内追払いとなった。豊八は三年以前延岡領に来て、博勞町丸屋五郎吉に頼んで紙漉稼札を取得していた。豊八は、贋札作りに「与風乗合」一〇匁札は都

合一二匁を拵えたが、「見悪キ札」であったため一枚も通用しなかった。丸屋五郎吉に対する町方の趣意書は次の通りである。

博労町

丸屋 五郎吉

右之者儀、佐伯領豊八・斧八右之者共、去ル末年雇入候節身元ハ勿論、往来證文等見届、其上ニ而日雇稼札可相願筋之処等閑ニ相心得、其上去八九月頃粟野名村江引移候由、其節限手切ニ相成候ハ、早速免札相納可申処無其儀、甚不都束ニ付急度被仰付方茂可有御座候得共、此度ハ御用捨を以日数十五日逼塞被仰付可然哉奉存候、以上²²⁾

五郎吉は趣意書通りの処分になったが、粟野名村庄屋も「贋札取扱候仕末ニ相成候而者、当人身分糺方不行届不念」として呵流の処分を受けている。

労働力不足を背景に、他領者でしかも帳外であっても、願出れば日雇稼札は容易に入手が可能であり、それだけ犯罪が起こりやすい状況にあったと考えられる。

二 事件と帳外

ここでは寛政〜文政期に、延岡領内で帳外によって起こされた八件の事件を取り上げ、帳外の動向や生業について具体的にみていきたい。

事例一 無宿人次郎右衛門・藤助・安五郎窃盗一件²³⁾

①無宿人次郎右衛門の場合

天明八年中のことである。高千穂岩井川村山中にあやしい者が忍んでいるということで、村方の者たちが召し捕らえて役所に差し出した。高千穂代官はとりあえず船尾役所に牢舎を命じて取り調べたところ、当人は帳外の幸助ということが判明した。実は幸助、盗賊の一味で本名は薩摩次郎右衛門といい、その時は牢拔けして逃げ去り行方不明となった。

盗賊らは、それから二年後の寛政二年春に城附恒富村伊達門、六月二十八日夜に黒木村恵助方へ押し入って強盗を働き、幸助こと次郎右衛門もそれに加わっていた。藩は非人たちに命じて方々探索させ、七月二十三日九ツ時、佐土原領の川原で涼んでいた次郎右衛門を召捕らえた。次郎右衛門は宮崎役所に入牢させられ、延岡表へ送られて岡富村にあった藩の牢舎に入牢となった。郡方白洲において郡奉行・町奉行に大目付が立ち会い詮議が行われた。次郎右衛門(当年28歳)の供述は以下の通りである。

自分の生国は薩州下中町で、十一歳の時に国元を出奔して帳外になった。二年前、高千穂岩井川村を徘徊していたときに召し捕らえられ、船尾役所に入牢となったが牢拔けた。各地で強盗を働き、佐土原表にいたところを捕縛された。捕縛される以前、昨年八月二十三日に延岡表へ来て喜惣次方に逗留しつつ、大貫村直助方では熊平、また同月末に平原門では喜三郎にそれぞれ案内を頼んで忍び入り、衣類等を盗んだ。

今年二月九日晚、伊達門に押し入り衣類等を盗み取ったが、その際の仲間には城ヶ崎紋吉・豊後平吉・筑前忠三郎と自分の四人だった。船尾役所を牢拔けた後は細嶋辺に行き、その後再度延岡表に出て、

曾木門の金助なる者と知り合い、六月二十八日に金助方に行った。忠三郎たちとも合流して、黒木村恵助宅へ押し入ろうと手配したが見咎められ、仕方なく曾木門の金助方へ戻り、最寄りの山中に隠れ二・三夜を過ごしてそれから穂北辺に行った。このように、次郎右衛門には各地に盗人仲間と手引きをする者がおり、ネットワークを頼りに盗みを繰り返していたのである。

②無宿人藤蔵の場合

寛政二年夏、岡富牢舎を牢抜けした帳外人藤蔵（25歳）は、御料穂北で召し捕らえられ、早速延岡表に引き取られて再牢を命じられて白洲で取り調べを受けた。以下、藤蔵の供述である。

自分は長州の出生であるが、幼年より親ともども国を出て薩摩に居着いた。しかし、父親が病死したため母親とともに薩摩を立ち退き、肥前天草にいるうちに母も亡くなった。嫁もないので、去る二月中に天草を立出て、肥後から高鍋を経て美々津辺りを徘徊していた。その時に目明かしの庄太郎と懇意になり、同人方に子分として暫く逗留した。二月五日、城ヶ崎紋と筑後「ブンデン」、それに長崎平吉という盗人ら三人で、反物八二反を美々津で盗取った。親方の庄太郎に持参して預け、庄太郎に盗みに入るによい家があれば手引きしてほしいと依頼していた。庄太郎からは寺廻門の喜左衛門方を勧められたが、そこには以前物貰いなどで度々出入りしたことがあったため、顔も知られているからと断った。しかし親方の庄太郎の勧めでもあるため断り切れず、同月八日夜、三人で喜左衛門宅の一町ほど手前まで行き、自分はそのから直ぐに立ち帰った。喜左衛門方から銀子二貫四〇〇目・衣類二五品を盗取り庄太郎方へ持参

した。自分は道案内をしただけで盗みには入っていないので、これらの盗品については一切知らない。盗品を返すよう非人頭片山平五郎から庄太郎へ打診があったが、自分は知らないとしらを切った。平五郎は直々出向いて厳しく追及したため、言い逃れできず盗品を平子郎にすべて渡した。盗んだ銀子や美々津で盗み取った反物はどうしたかと問われたが、あくまで知らないと言い張り、盗品のうち拾一枚は自分の着物があまりに見苦しいので平五郎から貰い受け、いま単物にして着用している。

寺廻門喜左衛門方への盗みの手引き後、親方庄太郎が言うには、三人が銭三貫文を手数料として藤蔵に遣わすというので貰ってこいとのことだった。三人は細島にいるというのでそこまで行き、目明喜三郎方に立ち寄り居場所を尋ねると、恒富村伊達門辺に稼ぎに行っているという。帰宅した彼らから銭三貫文を貰い、すぐに庄太郎に渡したが、彼に養われている身であるから、貰った銭は自分の自由にはできず自分は一切使わせてもらっていない。盗賊の捕縛に関わる目明かすと、盗賊一味はまさに同類であったことが分かる。

牢抜けの顛末を聞かれると、牢舎に自分と相牢していた良助と、何とか助かりたい、逃げ延びる手段はないかと相談しているうちに、良助に妙案があるという。良助は「小刀たはこ切之庖丁」を持っていたが、これは天井貫の間に挟まれていたものを見つけ所持していたものという。人目を忍んでこれで格子を毎日少しずつ削れば、格子は外れるはずということで、兩人で格子削りに励んだ。良助は便所の板敷の間にあったという火打ち道具も所持しており、それで削り木屑に火を付けて焼くと抜け穴が広がり、四月二十日夜に牢抜け

して塀を乗り越えて鍛冶屋敷から逃げ延びた。

牢屋を抜け出したのは夜五ツ時分頃で、すぐに新町目明方へ行き、預けておいた脇差を一腰受け取り、このまま美々津へ行くころには夜が明けるだろうから、二十一日は同所八幡山内に隠れて、それから米良山銀鏡まで行き、その後児湯郡内に立ち帰ったところを召し捕らえられた。

③無宿人安五郎の場合

次郎右衛門が穂北で捕縛されたときに、宮崎郡下北方村権右衛門方に盗みの談合をしていた安五郎も同時に捕縛された。延岡表でも押し入ったことがあるというので、宮崎から岡富牢を命じられた。安五郎(25歳)の供述は以下の通りである。

自分は豊前四日市の出生である。幼少の頃親に連れられ宮崎に来て、堂宮で育ち七歳のころから袖乞(乞食)をし、無宿者としてその後は奉公稼ぎをしていたが「悪心」を起こして盗人渡世人となった。

当二月二日、宮崎郡瀬頭で次郎右衛門と出会い申し合わせたのには、下北方村の和知川原権右衛門方に盗みに入り、衣類等二一品を盗取った。この盗品は飢肥藩領へ質物として入れ置いたところ、その後吟味のうえ先方が取り戻したと聞いた。伊達門に押し入ったことを厳しく詮議されたので白状すると、豊後から八戸梓越えをして延岡城下を通り、六月二十七日夜に曾木村金助方へ行った。次郎右衛門は金助と以前から懇意であったが、自分は初対面だった。次郎右衛門が先に行って宿を借りてくれたので、弥助・新助・私も続きそこに一宿した。なお最初由右衛門といったが偽りで、これは自分

安五郎のことである。

翌二十八日に黒木村へ盗取に行く相談をし、夜になって向かったが、先方は至って不運で盗みどころではなく、逆に追われてやっとのことで逃げ帰った。翌朝また金助徒へ行き食事等をしたが、ここは人の出入りも多いというので裏山に隠れていた。昼時分には金助が餅を振る舞い、暮れには金助方で夕飯を貰うなど世話を焼いてくれた。これは次郎右衛門が事前に銀札を渡していたからだろう。そのまま暇乞いをして豊後大野に向かったところ、「疝氣ふるい」となったため自分は水神宮に一人残り、三人は先に行った。宮崎に向かった自分は高鍋左太夫という者に途中で捕らえられ、穂北助右衛門に預けられた。佐吉という者の小屋にいたところ、七月二十三日に暑さに耐えかねて、川原で休んでいたところを宮崎中村町藤兵衛と追手三・四人に捕縛された。なお曾木村金助は、次郎右衛門らが捕縛される以前に、盗賊宿したことが露顕して岡富牢舎になり、詮議の末に白状した。

三人の供述をもとに郡奉行・町奉行が存念を尋ねられ、家老衆が相談して、十月二十六日付で次郎右衛門・藤蔵・安五郎および金助に次のような評決が下った。

無宿者 次郎右衛門

此者儀、去々年中船尾牢舎被仰付置候処牢拔致、其後御領内江入込御城下近辺ニ忍居致盜賊、剩党を催し百姓家江押入、盜之始終兇議之上及白状重罪ニ付、明廿七日場所恒富村之内於宿屋敷磯御仕置被仰付、死骸ハ前々之通日数三日曝被仰付候

無宿者 藤蔵

此者儀、当春寺廻門押入之手引致候付、岡富牢舎被仰付置候処、牢拔致重罪ニ付、明廿七日場所恒富村之内於宿屋敷討首御仕置被仰付、獄門之儀者前々之通日数三日曝被仰付候

無宿者 安五郎

此者儀、宮崎御領内ニ而盜賊致、刺黒木村押入之人数ニ候処、相陳詮議之上難遁及白状重罪ニ付、明廿七日場所恒富村之内於宿屋敷討首御仕置被仰付、獄門之儀者前々之通日数三日曝被仰付候

北方村之内曾木村 金助

此者儀、御法度相背盜賊共之宿いたし、其上黒木村押入之儀も乍存村役人江も不訴出、盜賊江者荷担不届至極ニ付、此度岡富永牢被仰付候

一味の張本人とみなされ、船尾牢抜けして徒党を企図した首領格の次郎右衛門は、恒富村宿屋敷で磔の極刑に処せられ、藤蔵と安五郎は討首となり、三人の首はともに獄門三日曝しに処せられた。金助は押し入りの手引きをしたわけではないが、盜賊宿をして食物など盜賊の世話をしたなどの罪状から、両奉行らの意趣としては領内追払であった。しかし、江戸では評儀の結果、「残党其外江之御取廻り之ため」岡富永牢となった。

三人は、仕置きを申し渡された翌二十七日、早速刑が執行された。

事例二 高千穂鞍岡村帳外六弥窃盗一件⁽²⁴⁾

高千穂鞍岡村の帳外六弥は、前年八月に所々で騙りや虚説を触れ

回り、また隠密方と偽って家中の名を出して虚言を重ねたとして、岡富牢のうえ五〇杖擲・日数三日曝しのうえ領内追払に処された前科者であった。⁽²⁵⁾ところがその後まもなく立帰り、高千穂所々において盗みや誘拐等をしたとして、二月二十九日に七ツ山村で捕らえられ延岡表へ送られ、岡富牢舎を命じられた。郡方白洲で郡奉行・町奉行・大目付が立ち会い詮議が行われた。以下は六弥の供述である。

去る寅（文化三年）八月中に追払を命じられ、竹田領の奥嶽という所へ行き、八日ほど日雇い稼ぎをして逗留した。それから同所を出て肥後領草ヶ部を通り、九月十四日に再び高千穂五カ所村に出た。翌十五日に下野村に行きかかると、三田井村の馬喰喜兵衛に出くわした。喜兵衛から以前貸した銭五貫文の返済を求められたが、持ち合わせがないと断ったところ、それならと持っていた傘をくれと言われたので傘を渡した。その際喜兵衛は、このあたりを立ち回るのは良くないから肥後あたりにいけというので、肥後に入り込んだ。同月十九日、肥後領菅ノ尾手永にいた「おのへ」という瞽女と出会い、高千穂上野村田ノ端から招きがあったと騙し、先に三味線箱と着物二品を自分に預かり、すぐにそれを売り払い代銀五五匁と茶代七錢八〇目程を懐に入れた。それから高千穂に入り込み、岩戸村土呂久鉦山に向かう途中で小間物商人に出合い、鼻紙袋筒一つと針二包を購入し代金は自分宿にしている岩上の久弥方で払うと謀った。商人は、これから山裏村へ行くので、代金は帰りに久弥方で受け取ると言い品物を渡してくれた。もちろん久弥に代金を渡すつもりはなく、品物を受け取ると向山村榎屋谷に行つて針売との触れ込みで

宿を取った。寝所脇に杠秤一つと脇差一腰があったのでこれを盗取り、宿には泊まらずにそのまま逃げ出した。同村尾峯の万兵衛方に立ち寄ったところ、このあたりはまだ夜なべをしているので、宿を頼んではどうかと話していると、追っ手と思われる者たちの声が聞こえたので、椎屋谷で盗んだ品物をそのままにして万兵衛方を逃げ出した。

それから奈須（椎葉山）に暫く潜んでいたが、何の稼ぎもないためまたまた高千穂三ヶ所村へ行った。田原村佐平治方から子守を探しているのに、三ヶ所村善蔵の娘を遣ってくれと言われたと親に偽りを話して娘を連れ出そうとしたところ、親は得心したが妹も一緒に田原村まで姉を見送らせるので、帰りは人を付けて送ってくれるよう頼んできた。見送りには及ばないと言ったが聞き入れず、仕方なく三人で出立した。田原村にいる娘らの伯母方へ行くと、三ヶ所村坂本門の圓蔵という者から、伯母方へこれが自分の謀りだとの便が届いていたため、娘らをそこに捨て置いて逃げた。娘は、以前自分が三ヶ所村で日雇い稼ぎをしていたときに懇ろになったもので、こっそり申し合わせて駆け落ちするつもりだった。

また岩戸村土呂久鉦山に行ったが特に稼ぎもないため、船尾を通り分城村へ出て曾木辺に来て、十月末に庵川村の金七方へ泊まっていたところ、近所に普請があり金七一家はその加勢に出かけ、祖母も近所に行くなど一家出払い自分一人だったので、衣類五つを盗取りすぐ逃げた。これを奈須で売り払った。

当正月初め、肥後領糶木というところで源蔵と虎治らに出会い博奕をした。その際源蔵が盗み出した品物を矢部で売り払い、代銀は

山分けした。二月十二・三日頃上野村権五郎方にて銭・羽織・股引などを盗取り、肥後岩屋で売り払った。去年九月十一日夜岩井川村惣治方での窃盗、および当二月五日夜岩戸村出火時に社人方での盗みも関与したと吟味されたが、九月十一日は竹田、二月五日は奈須に居たので、二つの事件には関与していないと言上している。

六弥の行動範囲は、高千穂郷三田井・上野・岩戸・山裏・向山・三ヶ所・田原各村々から、肥後・竹田・幕領椎葉山さらに延岡城附近と広範に亘るが、行く先々に同類・仲間がいて宿を提供していたことがわかる。六弥はこうした恩を仇で返すように、宿で衣類などを盗み取って換金していたのである。郡奉行・町奉行たちの趣意は次の通りである。

鞍岡村

帳外 六弥

此者儀、去年中不届之筋有之候得共、各別之御憐愍を以御領内追払被仰付候処、無程立帰而已ならず、高千穂於所々盗・かたり等いたし、重々不届至極ニ付、重キ御仕置被仰付可然者ニ候得共、各別御用捨を以場所岡富村之内於柳原討首御仕置之上、獄門者三日曝被仰付可然哉ニ奉存候

右之通相伺申候、以上

「各別御用捨を以」といいたながら「討首」「獄門者三日曝」とは解せないが、このような両奉行の趣意書に対して、御用部屋では家老以下による協議が行われ、次のような結論を出している。

六弥儀、前段之通不届者ニ候得共、両役存念通御仕置被仰付候而茂可然哉ニ候得共、誠ニ小盗同然之儀ニ而、外ニ深キ悪ル巧

等致候儀茂無之候得者、御憐愍難相成重科与申ニ茂無之候間、罪一等御用捨被成岡富永牢被仰付可然与、御家老衆始各逐相談、当三月廿六日之便江府江及相談候処、内藤治部左衛門始各逐相談、同意ニ付御前相伺候処、六弥儀伺之通岡富永牢可申付旨被仰出候段、返書申来居候付猶又各江茂申談、此節被仰付可然与、其段申渡候様、今日郡奉行・町奉行江茂申談書面相渡⁽²⁵⁾

六弥の犯罪は「小盗同然」で「深キ悪ル巧」をするのでもないとして、「罪一等御用捨」にて岡富永牢に処すというものであった。これは江戸家老の内藤治部左衛門らの同意も得ており、さらに当主内藤内藤政順も「伺之通」とのことと、六弥の岡富永牢が確定した。

事例三 宮崎郡花ヶ島町帳外順蔵窃盗一件⁽²⁶⁾

宮崎郡花ヶ島町帳外の順蔵が、城附長井村で召し捕らえられ早速岡富入牢を命じられた。郡方白洲で郡奉行・町奉行・大目付立ち会いのもと詮議が行われた。順蔵（28歳）の供述をみてみよう。

自分は花ヶ島岬岐治右衛門の譜代下人で、両親は無く兄一人と姉二人がいた。姉はすでにこれが縁付き、兄と自分二人は治右衛門方にいたところ、自分は「与風心得違」を起こし帳外の市五郎と申し合わせて、宮崎郡上野町後家はま方へ一昨年三月忍び入って、白木綿二束（二〇反）を盗んだ。このうち七反は花ヶ島町奉行虎助へ九六錢三貫七・八〇〇文で売り渡し、残り一二反は他領所々で売り払った。ところがこのことが露見したため、仕方なく同年四月に欠落して長井村で日雇い稼ぎをしていたところ、市五郎と花ヶ島町帳外の定四郎と出会い、去年の六月頃三人で申し合せて出北村久之助方

へ盗みに入り、衣類八品を盗んで三人で分けた。それから定四郎とは別れ、市五郎とともに竹田領へ行きから、所々で盗みを働きそれを売り払いながら生活していた。船便で大坂にも登り各所見物などしていたが、路銀が底をつきかけ逗留も難しくなったので帰国し、八月一日に宮崎郡大塚村虎蔵方を訪ねそのまま逗留した。

さて市五郎は以前、飢肥領清武新町部当の太田保左衛門方に三・四年奉公していたので、案内するから盗みに入らないかと誘われすぐに同意した。四月三日暮六ツ時過ぎ、二人で虎蔵方を立出て中村町を通りかかった時、雨が降り出したので誰ともしらない家の戸口にあった傘を盗み、清武町では火縄を灯して町内の様子を探ったところ、人家はまだ寝静まっていなかったので川端で暫く隠れ居り、夜九時過ぎに保左衛門宅の裏厩脇の竹垣を破って蔵の戸板を鑿ではずし、自分は蔵の前で待ち、市五郎が蔵の中へ這い入り、反物や足袋などを盗み出し厩脇まで持ち運んだ。鑿や脇差の折れたような刃物、それに火縄などはその場に捨て、盗んだ品物は往還へ持ち出して荷造りした。途中で人と行き会い怪しまれたが、中身は飢肥紙だと誤魔化し、そこから半道程山へ入り四日暮まで隠れていた。

夜になり伊満福寺境内の山へ行き、五日昼まで同所に忍んでいたが、空腹に耐えられず柿などをもいで食べた。夜に同所を立出で、大塚村の虎蔵方へ帰り、盗品は厩へ隠し置き一・二日逗留し、同方で包座四枚を調達してもらい、同七日に荷捲えした。改めて盗品を確認すると、白木綿六〇反程・染地沙木綿二〇反程・紺足袋一〇足・白足袋二〇足ほどであった。このうち白木綿三反・縞一反・足袋三足を虎蔵へやり、同七日夜同所を出立して豊後へ向かった。途

中高鍋領や幕領などで木綿四反を銀六匁で売り渡し、それから延岡領八戸門の長太郎方へ行き、木綿商人になりすまして逗留し、長太郎には白木綿を代錢三貫八〇〇文、縞木綿三反を代銀二九匁七分で売り渡した。そのほか同所で市五郎が白木綿六反を一反四匁五分、五匁位で売った。

逗留中は長太郎を頼り、三人で祝子川へ行く途中炭焼で縞木綿一反を代銀一三匁六分、白木綿一反を四匁五分、同二反を丁錢一貫文で売り払った。祝子川では一宿し、同所で白木綿二反を銀一〇匁、同二反を丁錢一貫文で売り払った。それから豊後路を登り、九月初に芸州へ下る便船があったので島崎からまた宮崎へ立ち帰った。

十月、市五郎と一緒に大塚村の高松仁右衛門方へ盗みに入り、衣類二枚・錢七貫七・八〇〇文程、花ヶ島町後家方で夜着一枚・拾二枚・羽織二枚・鍬一挺、江平町の庄左衛門方で衣類・帯など二〇品を盗んだ。これらの盗品を佐土原領分へ持ち込み、代錢七貫七・八〇〇文は花ヶ島町瀧右衛門に頼んで銀六〇目余に両替してもらった。その際に同人方で酒肴を調達してもらい、錢二〇〇文を支払った。

これらの盗品を持ち出して、豊後へ向かう途中八戸門の長太郎方へ立ち寄ったが、ちょうど同人は留守で娘が一人いたので酒の調達を頼み、酒を買いに出た隙に拾二枚を盗み取った。酒を飲んだ後同所を発ち、岡富村を通り臼杵へ出て、所々で盗品を売り払いながら各地を徘徊した。去る寅十二月二十八日、府内城下辺で市五郎と口論して立ち別れ、自分は筑前辺へ行きそれから別府に回って盗みを試みたが、土地不案内のため小盗みもできず、都政の手段も尽き果てたため、仕方なく宮崎表へ立ち帰る途中長井村で召し捕らえら

れた。なお、所々で盗み取った錢や品物を売り払った代錢は、その都度残らず酒食に使った。

市五郎や定四郎のほかに仲間はあるだろう、清武の太田保左衛門方へ盗みに入った時、飢肥領木崎の帳外金藏や当領中村町徳太郎らと申し合わせ、一緒に盗みに入ることがあるだろうと、再三きびしい吟味があった。しかし金藏・徳太郎とは面識はあるが、一緒に盗みをしたことはない、保左衛門方へは自分と市五郎の二人の仕業であると断言した。

この供述を受けて両奉行は、順藏に対する次のような趣意書を差出した。

宮崎郡花ヶ島町

帳外 順藏

此者儀、兼々不人品ニ而去ル丑年出奔いたし、其後度々御領内江立帰所々ニ而盗いたし、猶又去々寅八月三日夜、清武新町太田保左衛門方江花ヶ島町無宿市五郎与申合、兩人一同盗ニ入木綿八拾反程・足袋三拾足程盜取候段白状仕候ニ付、岡富牢舎被仰付置候、前段之通所々家藏江忍入盗いたし候段、重々不屈至極ニ付、於岡富村柳原ニ討首御仕置之上、獄門日数三日曝被仰付可然哉ニ奉存候

右之通相伺申候、以上

五月

郡方

町方

この趣意書を受けて、御用部屋で協議が行われるとともに、当五月二十五日便で江戸へ相談したところ同意を得た。当主および大殿

からも同意を取り付けたので、十一月二十七日に処刑が執行された。

事例四 神門村帳外友吉贖札一件⁽²⁷⁾

昨年十二月、高千穂三ヶ所村からの納銀に贖札が多く含まれていたと本方から報告があった。郡奉行・町奉行へ手配して厳しく吟味を命じたところ、山三ヶ村で旅人から札の両替を頼まれ正銀に引替え、その札を受け取ったがどうも怪しい。そこでこの札を城下へ送り、納銀が済むまでその旅人を村方に差留めていたが、贖札であることが判明したので召し捕らえ、延岡表に連行して郡方を取り調べが行われた。その結果、旅人は神門村の者で先年出奔して帳外になった友吉だと判明したので、とりあえず岡富入牢を命じ郡方白洲で郡奉行・町奉行・大目付立ち会いで詮議が行われた。以下は友吉（34歳）の供述である。

自分は神門村の生まれで、父親はなく母親はゆきと言うが幼年時に死んだ。ほかに親類もなく二歳まで村内にいたが、十一・二年以前にの下女と申し合わせて欠落し、下郡筋へ行き那珂郡や宮崎郡辺の所々を徘徊し、日雇い稼ぎをして暮らしていた。その後女は親類に返し、その日暮らして日々を送っていたが、やがて山師たちと知り合いになり、豊後国玖珠郡辺へ行き所々炭山や桶木の仕出しなどの山稼ぎをして暮らした。

去る巳年夏頃だったか、幕領児湯郡右松村新町へ行き一宿し、神門村生まれの杜人越後の倅大吉に出会い、いろいろ話をするうちに懇意になり、しばらく逗留するうちに竹田藩銀札の贖札作りの相談

をした。鹿兒島に腕の良い細工人がいるというので、大吉と連れだつて鹿兒島に赴く途中、薩摩領高岡村の旅宿で聞くとところによると、同所の川野助治という郷土が細工が巧みだとして、助治方を訪ねた。助治に面会して密かに竹田銀札の判彫りを七貫文で依頼し手付けに金二歩を渡し、印判受け取りには自分が来ることを約束して帰った。その後彫りあがった印判を受け取り、大吉宅で五匁札を二貫目ほど拵えた。隣村三宅村の新太郎と大吉それに私三人で、同年十二月頃豊後へ向かい、八戸を通り竹田領の宿では未明に出立し、贖札は紙に包んで出がけに預けておいたので、見咎められることはなかった。三重野宿から戸次辺に行き、酒代その他古着などを調達して、持参した札で支払おうとしたが、見た目が悪かったせいか一枚も通用しなかった。戸次では札の出所を問われ、露見しそうになったがころうじて切り抜け、速見郡辺を回り竹田城下の旅人宿荒岩松五郎方に宿を取った。そこで細島の忠治・筑後の伊兵衛・同千吉・高田の熊吉らと同宿になった。大吉は忠治と兼ねてからの知人で、大吉が忠治に竹田贖札が通用しなかったことを話すと、やり方もあるがここでは相談も出来ないので児湯郡に行こうと、翌朝七人連れ立って出立した。

大吉方に着いた後、忠治と伊兵衛が延岡領内の銀札判彫りを佐土原辺の細工人に依頼した。判彫りは程なくできあがり、皆で二貫目程の贖札を刷って七人で割合った。自分は三〇〇目程を受け取り、大吉・伊兵衛と三人で美々津、忠治は細島、熊吉・千吉・新太郎は富高新町へと三方に分かれた。この時大吉は、塩魚一駄を美々津で調達して自分より先に居村に帰った。自分は美々津の酒屋で贖札を

一八〇目正銀に両替し、それから伊兵衛に出会ったところ所持の札が両替できなかったので、自分に一〇〇目程渡した。同所で古着を一五〇目程で調べ、十二月晦日児湯郡へ帰る途中に村の者たち六・七人が自分を取り押さえ取り調べた。贖札使いが露見し、仕方なく正銀・古着及び使い残しの贖札、その他所持の鼻紙入などまで差し押さえられ、いろいろ言い訳してやっと逃げ出すことができた。

大吉方へ逃げ帰り、事の次第を話していると、伊兵衛・熊吉・新太郎らも帰ってきて、両替先や品々買調え先から追っ手が来て取り返された。このまま続けることは難しく、越年して元旦に自分と伊兵衛・熊吉の三人は豊後高田に向かい、高千穂を通り竹田へ出て吉郎という者方へ泊まった。夕方熊吉が風呂に入っていると、贖札使いが多数来ているがまもなく捕手が来るという話を聞いた熊吉は、驚いて馳せ帰り自分たちに知らせてくれた。その夜三人ともども逃げ出したが捕縛され、千吉も捕まり四人一同城下に入牢となり、厳しい吟味が行われた。贖札使いの本質は大吉で、他は手先同様だとし、自分たちは各別の咎めもなく、同年八月頃に境目三カ所に分けられて追払になり、自分は久住境に追払われた。なお竹田・延岡領の贖札判木は伊兵衛が所持していたが、吟味の際に取り上げられた。

さて、自分は久住から幕領速見郡辺で日雇い稼ぎで食い繋いたが、際だった稼ぎもなかった。下郡筋には仕別ける山稼ぎもあるというので、八月か九月頃児湯郡へ戻り山仕込みの仕事などを探していたところ、薩摩領高岡の川野助治方で山仕込みの仕事がみつかり、助治方に暫く逗留していた。十一月頃か、また「与風悪心」が発り、延岡領内通用の贖札を助治に拵えてもらえば渡世の凌ぎになると考

え、助治に頼み込んで八匁・五匁の贖札を彫ってもらった。穂北紙を調達に行った折に大吉方に立ち寄り、助治に贖札彫りを依頼していることを話した。穂北村で調達した紙一帖を助治に渡し、銀高一貫四・五〇〇目を拵えてもらった。助治とは、贖札が問題なく通用したら一〇〇目につき二〇目を札銀として渡す約束で贖札を受け取った。助治からは、試しに少しづつ遣ってみて贖札と見抜かれて通用しなかったら、無理に使うことはしないようにと念押しされた。

十二月初め、贖札を所持して大吉方へ行き、大吉に八五〇目程を分け遣し、残り六〇〇目余を自分が取った。一枚一枚を揉み込んで手垢を付け、大吉は煤にてわざと汚したが、あまりに黒くなりすぎたため自分所持のうち一〇〇目を取り替えて大吉に遣した。大吉と別れ、自分は入郷へ向かい、同月八日頃山三ヶ村へ行き、三ツ瀬の紙漉で奈須辺に猪買い出しに来たと偽って一宿し、正銀への両替を頼んだ。弁指方に掛け合うよう勧められ、弁指方で札二七〇目余を正銀に両替し、それから椎葉内へ行き三五〇目で鉄炮一挺を購入して贖札を渡した。たまたまそこに酒商人が来ていたので酒を求めたが、見た目が悪い札であったため受け取りを拒否された。鉄炮代銀もその札であったので受けとれないとして、売主から札を差し返されたので鉄炮は戻した。この様子ではとても札は通用しないと思い、山三ヶ村に帰った。

宿主から弁指元へ行くよう言われたので行ってみると、自分が両替した札を城下に納め一兩日で帰るので、それまで留まるよう命じられ、同所に逗留していたところを捕縛された。役人から吟味を受け、川野助治に彫らせた印判はどこに預けたか、助治方も吟味が行

われているので有り体に白状するよう命じられた。自分は印判の所持は勿論なく、すべて助治が以前から所持していた印判で、自分は札のみを所持していた、贋札は山三ヶ村および椎葉内のほかで造ったことは決してないと答えた。

友吉の供述をうけて両奉行が出した趣意書は次の通りである。

神門村

帳外 友吉

此者儀、先年出奔仕帳外ニ相成居候処、去ル巳年御料児湯郡右松村之内新町江罷在候帳外大吉与申合、竹田御領通用之銀札、并当所通用之振手形贋札拵、尚又去申十一月振手形贋札振、同十二月中右大吉江も分ケ遣シ、御領内江入込右贋札遣ひ候始末不届至極ニ付、重キ罪科ニ茂被仰付可然者ニ御座候得共、為弁利御差出被成候振手形之儀ニも御座候間、各別之御憐愍を以此度岡富永牢被仰付置可然哉ニ奉存候

両奉行の趣意書は江戸へも相談されて同意を得、当主からも了解を取り付けたので、趣意書通り岡富永牢が命じられた。

なお同村帳外の大吉は、出奔後御料児湯郡右松村新町に居住していたため、入墨して三日曝し五〇杖擲のうえ領内追払に処せられている。

事例五 高千穂上野村帳外角右衛門立帰り一件⁽²⁸⁾

高千穂上野村帳外の角右衛門は、一昨年申（文化九）年に「不都束」であると領内追払を命じられていたところ立帰り、当四月王子権現

（原野神社遷宮の場所で塩肴等の商いをしたとして召し捕らえられた。以下は、宮水役所で詮議を受けた角右衛門（56歳）の供述である。

自分は領内追払となったので、昨年六月までは肥後領で日雇い稼ぎをしていたが、同所では稼ぎもよくないので、同年七月から竹田に行った。竹田ではたまたま同所西光寺本々普請があり、同寺に日雇いとして雇われて稼ぎを行った。しかし、上野村に残した倅佐太郎はかねてより積（疝癪）持で、ここ二・三年以前より強い発作が起り難儀していた。旧冬も押し詰まったころ、灸治療として竹田へやってきた佐太郎と会い、症状を聞いた自分は薬を調達してもらい別れた。その後の経緯を聞いたところ病状に変化はなく勝れないというので、竹田町の長崎屋という薬種店で佐太郎の病状を詳しく話し、薬を調査してもらった。この薬を佐太郎に飲ませたい、対面したいと思ったが、追払の身であるので領内に入込むことができないのは心得ていたが、倅の病状が気にかかる。調査してもらった薬を少しでも早く服用させたい、家へ届けたい一心でいた。また当月三日は上野村王子権現社の遷宮があると以前聞いていた。竹田城下を立出る際に町方で塩鰯を見つけたので、立帰りついでに持ち帰り、遷宮祭で倅に商わせ飯料等にでもなればと塩鰯を仕入れた。

三月一日夕方竹田城下を出立して、同夜は竹田内小川というところに一宿し、翌二日夕時頃上野村居宅に着いた。佐太郎の病状は依然芳しくなく、調査した薬を服用させそりまま宿元に泊まった。翌三日は遷宮日で持ち帰った塩鰯を商わせたかったが、佐太郎は外出もできない状況だったので、昼頃から塩鰯を自分が宮水へ持参して商い、暮れ頃居宅に戻った。間もなく村人二人が来て、庄屋の命だ

として召し捕らえられた。

奉行からは、倅に薬を持参し対面するために立帰ったのであれば外出する必要も無かったはずである。どうして人が大勢集まる場所に来て商いなどしたのか。なにを企んでいたのかなど聞かれたが、特別な意味はないと答えた。追払の身ながら立帰ったのみならず、神社祭礼で大勢人が集まる場所で商いをするとは「不恐御上致方、重々不都束至極」として、郡奉行は次のように趣意書を提出した。

高千穂上野村

帳外 角右衛門

此もの儀、去ル申年不届之儀□□御領内追払被仰付候処、当月三日右村王子権現社遷宮御座候場所江、塩肴商ひニ罷越候付、其俣難相成召捕候趣右村方訴出候処、御法相背候而已ならず、大勢人集之場をも不憚、旁以不恐上を致方不届付、急度被仰付方茂可有御座候得共、公儀御赦被仰出候砌ニ茂御座候間、各別之御憐愍を以御領内追払被仰付可然哉奉存候

右角右衛門倅

上野村 佐太郎

此もの儀、親角右衛門立帰候を一宿為致候儀、父子之情合難□□乍申、不憚上を致方不都束□□、急度被仰付方茂可有御座候得共、公儀御赦被仰出候砌ニ茂御座候間、御憐愍を以日数七日遠慮被仰付可然哉奉存候
右之通相伺申候、以上

四月

郡方

この郡奉行からの趣意書に対して、御用部屋では協議の結果「右何れ茂申達之通夫々御手当被仰付候間、訴段可被申渡候」との付札で指示を出した。

領内追払となった角右衛門は、肥後・竹田で日雇い稼ぎにありついて、何とか生計を立てていた。角右衛門は倅佐太郎に薬店で調合した薬を買ったり、飯料の足しになればと塩肴を仕入れて商いをするだけの資金は所持していたことがわかる。日雇い稼ぎで資金を貯め、それを元手に小商いをするなど、帳外たちのしたたかな生活力をみることができる。

事例六 佐伯領津久見村帳外弥右衛門窃盗一件²⁹⁾

豊後佐伯領津久見の帳外弥右衛門は、領内へ立入り小盗などをして非人たちに二度追払われた。ところが弥右衛門は又々立帰って、五月中に伊福形村百姓助蔵方に忍び込んで品数を盗取り、盗品を長井村竹瀬門徳次郎に預け置いて豊後へ戻った。七月二十一日にその盗品を取りに来たところを非人たちによって捕縛され、岡富入牢を命じられ郡方白洲で両奉行・大目付立合で吟味がなされた。弥右衛門（50歳）の供述は次の通りである。

自分は国元（佐伯）に居るときは百姓の片手間に小商いをしていて、不運にも借銀が高んでみ渡世でなくなり、一八・九年以前に国元を出奔して竹田領分に行った。そこで日雇いをして日銭を稼ぎ、その銭で塩肴を買入し、肥後領分から当領高千穂村々へ持ち込んで葉煙草類と交換して、それを竹田表へ運んで売り払っていた。

一〇年余り往来したが、主に竹田領を拠点としていた。六年程前から田舎の品を当領浦付村々や細島・美々津で塩肴類と品替し、それを山陰・坪屋など奥村に持ち込んで、あちこち小商いをした。帳外の身であるから忍びながら国元にも帰り五〜七カ月逗留し、商いの元手が無くなれば不定期に日雇い稼ぎをして、定宿もなく辛うじて生活してきた。昨年九月頃だったか、門川村内小原を通りかりある百姓家に立ち寄ったところ、家内はみな不在であったので「風与悪心発」った。目についた女着裏・子供着・帯・布子・廣袖各一、計五品を盗取ったところを目明かしに見咎められたため、品を返し追ひ払われた。それから竹田領へ行って所々で日雇い稼ぎを行い、元手が少してきたのでまた小商いを始め、高千穂で山産物を仕入れて美々津辺まで、所々で売り歩いていった。

当五月七日昼頃、伊福形村の奥まった一軒家を通りかかった時、家内は残らず田植に出払っていたのを見て、またまた「悪心発」して入り込んでみると、座敷に錠前のない櫃があった。これ幸いと櫃の中の着物品々や風呂敷包・飯次（飯櫃）があったのですべて盗取り、都合三四品を持ち出して裏山に隠した。日が暮れた後で持ち出すつもりでいたところ、あいにく雨が降り出し九日まで降りやまなかった。漸く十日昼過ぎに長井村内竹瀬門の店屋へ行き酒を飲み、それから高千穂で新茶を買い込み、延岡から下関へ小船で積廻して直段も良くよく売れた。盗品の着物類を田舎に持って行き売るつもりで、宿を頼み一宿した。昨年九月頃だったか、路銀に差支えたので半天・単物など衣類三品を徳次郎に四五匁で質に入れておいたものを、元利二〇目四分で請戻し、良く十一日朝出がけの際に亭主は留守だっ

たので女房に、冬物古着は当時売れないので暫く預てくれるよう頼み、一二品を風呂敷に包んで封印し、その上に自分所持の着類三品を載せて預けた。木賃と酒代を渡して出立し、肥後表で徳次郎方に質入していた衣類のうち、一部を在所で懇意にしている和尚の弟で坊主になっている者に届け、残りの品々は肥後領内所々で売り払い、その代金はすべて酒食に費やした。元手が無くなったので、竹瀬に預け置いた衣類一二品を請け出して売り払おうと、肥後表を当七月七日に出立し、十日昼頃竹瀬へ着いたところを召し捕らえられた。

奉行から、外にも盗取ったことはないか、伊福形村での盗品は品数が多いので一人では無く同類がいたであろう、徳次郎を頼み質に入れた三品も盗取ったものであろうなど、再応厳しく吟味がなされた。盗みの共犯がいけないのは勿論、門川村只八方と伊福形村助蔵方以外は盗みに入ったことはない、通りがかりに留守や戸締まりしてない家に盗みに入ったのであり、「渡世難渋之余り悪心発」したまでで、質に入れた三品のうち半天・単物は自分が所持しているもので、衣は届物で盗品では無いと言上した。竹瀬門の徳次郎との関係について、自分は竹田領を拠点にしており、当領は商売の折に往來するのみで徳次郎方は定宿では無いこと、昨六・七月頃豊後から商売に通じかけた際に一宿し、その時初めて顔見知りになったという。その後九月頃にも通りがけに一宿し、当五月九日まで都合三泊した。小盗みしたのを隠し、豊後商人と称して往來していたので徳次郎を「正直之仁」とみて盗品を預けたのであり、宿賃や酒代も相応に支払ったのであり、ほかに銀錢・衣類などは勿論何品にても

遣したことはない、徳次郎が一味であることは強く否定した。

弥右衛門の供述をうけて、御用部屋へ差出された両奉行の趣意は次の通りである。

佐伯領津久見村

帳外 弥右衛門

此者儀、十八九ヶ年以前居村出奔仕、肥後・竹田并御領内・御料所ニ而、茶・多葉粉・塩肴等小商ひ、間ニ者所不定日雇稼罷在、去西九月中門川村通掛り、同村只八宅江立寄候処家内留主ニ付、与風悪心起り衣類五品盗取、同村目明ニ被見咎右品取戻シ被追払、又々日雇稼并小商ひ等仕罷在候処、当五月七日昼頃伊福形村通掛り、助藏家内田植ニ罷出候を及見立寄這入見候処、錠前無之櫃有之、其内方着類品々外ニ風呂敷包・飯次等都合三拾四品盗取、右之内拾式品長井村之内竹瀬門店屋徳次郎方江預置、其餘之品々者肥後御領分辺江持参売払、代錢酒食ニ遣捨候趣申立不届至極ニ付、重科被仰付可然者御座候得共、通掛り留主を及見、昼中戸ノリ無之所江這入盗取候儀ニ付、格別之御憐愍を以入墨・三十杖敲・日数三日曝之上、御領内追払被仰付可然哉奉存候

長井村竹瀬門

徳次郎

此者儀、作間之稼請酒渡世仕罷在候処、去夏頃日不覚暮方、豊後商人之由ニ而立寄酒給候上、宿賃呉候様申聞一宿為仕、其後九月頃参一宿、路銀差支候由ニ而衣類質入之儀頼を受質ニ入遣シ、当五月十日又々参一宿為仕、質ニ入置候衣類受出シ、翌

十一日未明此もの罷出候留主、風呂敷包江封印仕、其上江衣類三ツ載、妻江預置出立仕候由之処、右預候風呂敷包之品者盗物之由引合有之候付、片山非人頭江引渡候趣之処、旅人もの宿仲間敷段者兼々嚴敷被仰出茂有之、殊ニ出所不知怪敷もの三度迄宿仕、衣類質入遣、其上衣類預り置候段不都束之至ニ付、被仰付方茂可有御座候得共、利欲ニ拘り宿仕候筋ニ茂無御座、酒代旅籠代等茂応而受取、全性質愚昧之者ニ而、商人与而已心得偽之弁茂無之、右及始末候儀ニ而吟味中数日慎申付置、旁ニ付各別之御憐愍を以、過料錢三貫文御取上、廿日逼塞被仰付可然哉ニ奉存候

右者、従公儀御赦被仰出候砌ニ茂御座候間、書面之通被仰付候様仕度、此段相伺申候、以上

戊 郡方

九月 町方

いずれも御用部屋で審議され、両奉行の趣意書通り弥右衛門は入墨し三〇杖敲き、三日曝したうえで領内追払、徳次郎は過料三貫文と二〇日の逼塞を命じられた。弥右衛門の窃盗が、計画されたものではなく「通掛り留主を及見、昼中戸ノリ無之所得這入盗取」、すなわち偶然犯行に及んだと判断されたのである。また徳次郎も、旅人の止宿を厳禁する法を犯した「全性質愚昧之者」と断じられたのである。

この一件で注目されるのは、弥右衛門の小商いの内容である。弥右衛門は自身の労働力を唯一の資本として日雇い稼ぎで元手を貯め、それで塩肴を仕入れて山間村々に持って行き、多葉粉や茶など

の山産物と「品替」して、それを海辺村あたりで売り歩くという方法で小商いを成立させていた。日雇い稼ぎがどれほどの財源となるかは覚束ないが、正式な生業に就くことが見込めない場合であつても、何とか生きて行けることはできたと考えられる。弥右衛門のように商才のある者は、山産物と海産物を「品替」するなど目敏く需要を見出し、小規模ながら山海間の流通の担い手として活躍したのである。

事例七 佐土原領帳外武右衛門贖札一件⁽³⁰⁾

佐土原領の帳外武右衛門が、高千穂向山村吉次郎と申し合わせ、預り手形の贖札を使用した廉で召し捕らえられ、宮水役所で一通りの吟味を受け延岡表へ送られて、郡方白洲で両奉行・大目付立ち会いで詮議を受けた。武右衛門（31歳）の供述から、その生い立ちと犯行についてみていこう。

自分の親は小玉長蔵といい、佐土原藩に足輕奉公をしていたが、私が九歳のときに病死した。その後兄弥右衛門が引き続き足輕となったが、兄も亡くなり甥の武市が跡を継いだ。自分は一〇年以前に国元を出奔し、高千穂辺で「ふこ（畚・もっこ）」を商ひ、合間に笠などを作り渡世していた。五年以前に国元に立帰ったところ、自分が帳外になったと聞いて驚き、また高千穂や竹田で「ふこ商ひ」をした。

高千穂向山村の吉次郎とは、去る申（文化九）年頃から商売先で知り合い、時折同宿することもあった。自分は三年以前に竹田領神

原村名子園という所で「日雇人場帳」に入り、内々に百姓の智養子になった。「日雇人場帳」とは、他所から日雇い稼ぎに來た者たちを村役人方に届出て、日雇取帳に登録した帳簿である。自分は養子先で養母・妻と三人暮らしの小百姓になった。

当八月十八日暮頃、吉次郎が竹田から戻りがけに立ち寄り一宿した。その際吉次郎から、当時高千穂で通用している新札は一匁につき丁錢一〇七文になるなど、結構な儲けになるので贖札は作れないかと持ちかけられた。以前牛代に吉次郎から七錢三〇目三分の借金があったが返済できず、また「困窮ニ迫りせつなさの余り与風」話に乗ってしまった。特別難しい判でなければ彫ってみようと、向山村の吉次郎方で贖札作りをするため、翌十九日昼頃二人で出立した。同夜は五ヶ所村に泊まり、翌二十日上野村で昼飯を取っていると、麻苧を買いに來た商人から、吉次郎所持の岡札を五匁の新札に引き替え自分に見せ、それから押方村の酒屋で酒を頼み、二匁の新札に引き替えた。翌二十一日、吉次郎方に着き、隣家の明家に留置かれた。五匁札の表を吉野紙に写し取り、二十九日に手土産として吉次郎から茶三貫目程を世話してもらい、同人方を出立して竹田へ帰った。

九月七日、自宅に吉次郎が来て贖札の相談をしたが、竹田近辺は勿論高千穂あたりでも贖札を作るのは危険だということで、当夏に出奔した吉次郎次男外太吉が豊後宇目辺に居るらしいと聞いて、自分は道案内すると偽わり吉次郎と同道して豊後に向かった。竹田領奥嶽山中に知人の一軒家があり、そこを借り受けて贖札を作ることにした。知人に贖札作りを打ち明けたところ、昼間は皆山仕事に行

くのでその間に作るよう言われた。すぐに判木などを作ってみたが、小刀ではうまく彫れず吉次郎が所持していた「馬針」で五匁札表を彫った。ところが翌朝村役人たち五・六人が来て、自分たちを怪しんだ庄屋が出頭するよう言いつけたというので、急いでそこを立ち退いた。途中で吉次郎は宇目へ回り卯太吉を探し出し、十四日に三人で立出して、自分には十八・九日に吉次郎方へ来るよう話して別れた。

十八・九日に竹田を立出し、懇意にしていた上野村市五郎方に一宿したが、市五郎は「至而人之宜もの」であるので贖札作りを打ち明けた。自分は「生質氣弱」いため新札を作っても自分で遣うことはできないので、市五郎に遣ってみてくれと依頼した。市五郎は、できが良ければ馬でも買うのに使おうかと言ってくれた。翌日市五郎宅を立出て、丸尾野の紙漉方へ立ち寄り三枚合紙を一枚一五文で調達し、二十三・四日に帰る時に一〇枚程拵えておいてくれるよう頼んで吉次郎方へ向かった。

同人方から八丁程離れた山中岩屋に吉次郎と行き判を彫ったが、「亀」の判が特に難しかった。裏からも彫ることができず、表から彫ったため亀の判向が逆になってしまったが、新札であるからよく模様を見知っている者は少ないので、大体であれば通用すると話しあい、吉次郎も手伝い漸く五匁札二〇〇目だけできた。このうち一三〇目を吉次郎、七〇目を自分に取り分けた。自分は上納銀二〇目を用意しなければならなかったので、吉次郎から麻苧一貫二〇〇目程を借り受けて同所を立出し、帰りに紙漉方で合紙一〇枚を贖札一四〇文で支払い、市五郎方に立ち寄った。同人の

世話で麻苧売り払い代銀は受け取り、市五郎にできあがった贖札をみせたところ、良いので使ってみるというので七〇目のうち六〇目を渡した。鰻^{うなぎ}一升につき銀四匁で六升受け取り、勘定は後日払うと約して帰宅した。

九月二十七日、居宅を立出て翌二十八日吉次郎と再会し、同人方へ牛買いに来たと偽って止宿した。三匁・四匁札二枚を受け取り、翌二十九日牛買いに行くと言って吉次郎と立出し、山中の作場小屋で四匁札を吉野紙に写し、四匁判と亀判の彫り直しとにできあがった。翌晦日にはまた作箱やへ行き三匁札の判を彫り、紙拵えなど二人で行い、不出来なものは切捨て三匁・四匁・五匁札表を都合三五〇目を作った。翌十月一日、このうち一五〇目に裏判を押し揃え、諸道具は小屋軒へ隠し、吉次郎とともに三ヶ所村へ行き蕎麦代として吉次郎が偽三匁札を遣った。その夜は同村藤右衛門方に泊り、翌二日は同村吉次方で麻四貫目を代銀五〇目四分で買い、自分所持の贖札四八匁に吉次郎借りた贖札三匁を加えて五一匁とし、吉次郎から六分の釣りを受け取った。それから押方村小谷で麻四貫二九〇目を代銀五五匁で買い、同村徳別当で買った麻を四貫目ずつ吉次郎と分け、残り二九〇目は家内への土産にして分かれた。

翌三日竹田へ帰り、十月二十日ころ吉次郎が茶と麻を馬に荷付け自分方に立ち寄り、土産に茶二升をくれた。その夜は自分宅に泊まり、吉次郎は竹田へ商売に行ったが、また帰りに立ち寄り、贖札の諸道具は自分が所持していたので、未完成の札に裏判してくれるよう頼まれた。自宅ではできないからと、吉次郎を見送るふりをして家を出て野道で一三〇目だけ裏判して吉次郎に渡し、残り七〇目余

は後で自分が裏判すると道具類は預かって分かれた。道具類は床下へ隠しておいたところ、十一月三日未明、村役人たちが呼びに来たので出頭したところ、向山村の吉次郎と申し合わせて贖札を作った一件を問い糺されたので、あっさり白状した。判木および作った贖四匁札一枚・贖三匁札一枚都合七七匁ともに差出すよう命じられ、手鎖・腰縄をつけられて牢に入れられた。その後宮水役所に引き渡され、そのほかの贖札数や使用形跡、仲間の有無など厳しく取り調べられたが、吉次郎以外に仲間はおらず札数もほかはないと返答した。

両奉行が提出した趣意書は次の通りである。

佐土原領

帳外 武右衛門

此者儀、御預手形之贖可取扱与、向山村吉次郎申聞ニ同意致、
兩人申合取拵候趣及白状不届至極付、重科ニ茂可被仰付候得
共、御用捨を以百杖擲・日数五日晒之上、御領内追払被仰付可
然哉奉存候

この趣意書をもとに御用部屋で協議が行われ、「入墨致於場所日数三日晒・五十杖敲、御領内追払被仰付、尤肥前国長崎徘徊御差留被成可然」との評決が出された。

一方吉次郎は、十月十七日、吉次郎は茶三貫目と麻三貫目を馬の荷付けして居宅を出立し、河内村の勇藏方へ止宿した。その際に所持していた贖札二七匁を岡札に引き替えた。翌十九日に竹田町へ行き茶・麻苧を売り払って布団と着類などを買ひ、また武右衛門方へ立ち寄り、捲えかけの札に裏判してくれるよう依頼した。居宅では

できないと家を出て、見送りを装い途中野道で二三〇目だけ裏判したものを受け取り、残りは追々裏判して遣すとして分かれた。帰り道、河内村の郡蔵方へ泊ったところ、行きがけに岡札に引き替えた二七匁を番所に差出すと悪札だとして突き返された。高千穂出役していた口屋見廻役岡田圓治が検分したところ、贖札に間違いないと断定された。⁽³¹⁾ 庄屋元に連行される途中、吉次郎は武右衛門から裏判してもらった贖札一三〇目を、上野村と押方村境の川に投げ捨て隠滅を図ったが、宮水代官によって厳しく吟味され、岡富牢を命じられて郡方白洲で再度取り調べを受けた。

吉次郎の供述は武右衛門とほぼ一致するが、贖札の通用状況は大きく違う。「亀之判向キ違ひ」のせいか、五匁札を上納銀として弁指元へ差出したが通用せず、このほかにも使ったが通用しなかった。十月五日、肥後領馬見原町奉行帯屋松五郎方で、以前借用していた二・三匁を贖札で払い、丸尾野の無尽銀や三ヶ所村七座頼母子に贖札を使ったが通用しなかったという。

吉次郎に対する両奉行の趣意書は次の通りである。

高千穂向山村

吉次郎

此者儀、御預手形之贖札拵可申与、帳外武右衛門江発言いたし、
兩人申合取拵候趣及白状、不届至極付重科ニ茂可被仰付候得共、
御用捨を以岡富永牢被仰付可然哉奉存候

吉次郎は両奉行の趣意書通り岡富永牢となった。

この一件で注目されるのは、武右衛門や吉次郎の行動範囲の広さである。武右衛門は竹田領、吉次郎は高千穂向山村の居住であった

が、彼らは高千穂郷内はもとより、高千穂と竹田・肥後間を頻繁に往来していた。また、高千穂の特産物である麻苧が換金作物として恒常的に用いられていた。例えば上納銀二〇目に窮した武右衛門が、吉次郎から麻苧一貫二〇〇目程を借受けたり、三ヶ所村では吉次方より麻苧四貫目を代銀五〇目四分を、また「名前不存」者から同四貫二九〇目を代銀五五匁で支払う（いずれも贋札）など、相対売買が広く行われていたことがわかる。延岡藩では安永三（一七七四）年六月に、城下博労町に麻苧会所を設置し、会所発行の出切手の無いものは大坂への船積みを禁止するとともに、領内の麻苧買い入れは、口銀を免除された仲買商人を廻村させて集荷する方法が採られた。翌四年、藩は麻苧の主要生産地である高千穂郷三田井村に会所を設置して、会所掛合に奈須・林田ら城下町商人六人を任命して業務に当たらせた。⁽³²⁾しかし吉次郎の例にみるように、専売化を進める藩の集荷ルートとは別に、商人と生産者の間で広く相対売買がなされていたのである。

事例八 帳外廣吉窃盗一件⁽³³⁾

文政二年十月二十日、帳外廣吉が高畑門鍛冶吉田鶴太郎細工所に忍び込み、斧・鎌を盗み取ったとして召し捕らえられ岡富入牢を命じられた。郡方白洲で両奉行と大目付立ち会いで詮議が行われ、口書が差出された。廣吉の供述は次の通りである。

父親は自分が幼い頃に欠落したので、顔も覚えていないが、筑後の者であったと聞いている。母は城下紺屋町儀右衛門の家内であっ

たので親類もいて、自分は方々の親類方で育った。昨年八月頃、宮崎表へ行きあちこちで日雇い稼ぎをしていたところ、上野町のくらという後家の一人娘の婿養子になった。程なく養母とは不仲になったが、妻とは離縁しなかった。当正月中妻と同道延岡表へ出て、宮ノ下大工喜三郎方に同居していたが、中町長次郎方で縮香二丸を盗み取り、博労町幾久屋治八方へ代銀四匁で売った。

四月中、祝子村で干してあった投網一帖を盗み、新小路川原町で代銀一七・八匁で売り払った。その頃宮ノ下辺で博奕に携わり、吟味が入ったため妻と宮崎表へ逃げ、所々に逗留した。六月頃、妻を召連れて延岡へ行ったが、城下へ逗留もできず、川島村須佐門の与三郎の空き家を借り受けそこに住んだ。同月中北小路の藩士児玉八百七様方前を夜分に通りかかったところ、座敷の障子だけだったので忍び込み、縁端に置かれていた帷子二・袴二・子供着単物一を盗んだ。それから北小路の同福嶋見龍様方で書物一冊を盗み取り、このうち袴一を新小路四ツ辻東方屋敷へ代銀六匁、残りの袴は三ツ瀬屋敷に代銀三匁で売った。書物のうち四冊は須佐門上ノ坊倅へ代銀三匁で売り、七冊は差木野門目医者方へ質に入れて銀三匁を借りた。それから細島へ行き、子供着の単物一を売ったが帷子には買い手がつかなかった。

七月六日頃、妻と連れだって竹田表に行き、逗留している間に帷子二つのうち一つは七錢七匁、残りは同八匁で質に入れた。竹田でも博奕に手を出して吟味をうけ、逗留できなくなり所々を徘徊し、佐伯表へも行ったが稼ぎ口はなかった。十月十七日、延岡へ戻り川内名村松葉に二泊、深瀬へ一泊し、それから祝子村檜山の熊次郎方

で宿を借り受け、十九日夜自分ひとりで宿元を立出し、通りかかった高畑門の人家前にあった風呂敷包一枚を盗んだところ、古拾一枚・単物一枚が入っていた。それから元町炭屋前にあった柳行李を盗んだが、中にはたいした品物は入っておらず、古提灯一張・大師御札・帳面一冊・算盤一台・矢立一本・古い紙入れ一点と、五匁札二枚・四匁札一枚・銭一〇〇文程があった。また北小路の八百七様方へ遊び込み、書物五冊を盗み、それを携えてその夜は榎山宿へ帰った。

翌二十日夜、また立出て五ツ半時分に高畑門の鍛冶吉田鶴太郎の細工所へ遊び込み、そこにあった斧や鎌類をもてるだけ盗み、宮ノ下で盗んだ六尺棒で担いで榎山宿に帰った。熊次郎や妻へは、高畑門の鍛冶屋俵から、恐らく博奕のかたであろう品を長井村まで持って行くよう頼まれ、望みの者があれば売り払うようと話しておいた。翌朝熊次郎も手伝い、斧・鎌を俄で包んだところ斧一〇丁・鎌六丁ほどあった。熊次郎へは宿賃として古斧一丁に五分札一枚を遣り、翌二十一日、柳行李や着類の荷捲えして立出した。日ノ谷へ一宿し、そこで近所の者へ古斧一丁を銀二匁五分で売り、山師へ同一丁を代銀二匁七分で売った。その宿亭主が所持する古斧と持参の斧を取り替えを頼んだので、宿賃として取り替え、二泊して立出した。八戸を通り下赤へ一宿し、翌日再度八戸へ出て、葛葉を上納する船に乗船し、伊良原で一宿して翌日熊田へ行った。庄屋元近所で鬼神野村の者へ古斧一丁を銀四匁で売り、再び葛葉上納船で無鹿まで行き、そこで古斧一丁を船頭へ船賃代わりに遣り、残りは包みのまま船に置いておいた。元町炭屋前で盗んだ柳行李中へ、八百七様方で盗んだ書物を入れ、高畑往還で盗んだ古拾・単物等は太武町濱藤屋傳兵衛

衛近所の家へ預けた。これ以外の盗みはしていないし、盗み仲間もいないと訴えている。廣吉の場合もその行動範囲はかなり広く、飛地や他領へも簡単に往来している。廣吉は行く先々で手当たり次第盗み取り、藩士宅まで盗みに入るなどその大胆さには驚かされる。廣吉の供述を受けて、両奉行は次のような趣意書を提出した。

帳外 廣吉

此者義、纔之品与者乍申所々ニ而盜仕候而已ならず、御家中屋敷江も忍入盜致候段不届至極ニ付、重キ罪科ニ茂可被仰付候得共、各別之御憐愍を以入墨之上、御領分追払被仰付可然哉奉存候

入墨した上領内追払というものであったが、御用部屋からの付紙には「肥前国長崎徘徊御差留被成」との文言が付与されていた。なお、遠慮や慎など軽い謹慎刑ではあるが、廣吉に宿を貸したり世話をした者や村役人たち一三人の処分もなされている。廣吉は十一月二十三日に岡富牢を出され、翌日入墨のうえ領内追放となった。⁽³⁴⁾なおその際に、手向け料として藩から錢五〇〇文が与えられている。

むすびにかえて

犯罪や出奔によって共同体から放逐された無宿Ⅱ帳外たちの行動を通して、同類たちのネットワークの存在や、彼らが生きていくための糧をどのように得ていたのか等について、八件の事例を検討してきた。明らかにしたこととをまとめて結びにかえたい。

まず、帳外たちのネットワークが藩領域を超えて広く存在していたことである。藩は旅人や他領者に対して、街道筋の町村には一宿、それ以外の村には止宿を厳禁する触を度々出していた。しかし、帳外たちは行商人と偽って宿を求めたり、また一方では帳外と知りつつ止宿させる者たちが少なからずいたのであり、宿貸して処罰された例は少なくない。なかには自宅で賭場を催す博奕宿もあり、藩はその摘発に苦慮していた。犯罪者の摘発は、主に非人や元犯罪者たちが目明しとして担っていたが、帳外藤助のように目明しと盗賊は子分となり、窃盗に荷担する場合もあったように、目明しと盗賊は表裏の関係にあったことが分かる。

次に、藩境には番所が置かれていたにもかかわらず、藩領内外への移動が自由かつ広範に行われていたことである。いずれの帳外的一件でも、彼らの行動範囲の広さには驚かされる。例えば高千穂鞍岡村帳外六弥の場合、領内を追放された後竹田領へ行き、そこから肥後領を経由して高千穂郷へ入った。高千穂郷では五ヶ瀬北岸の三田井村・上野村・田原村・岩戸村・山裏村を回り、南岸の向山村から奈須山(椎葉山)・三ヶ所村を往復している。さらに肥後領・竹田領・椎葉山や延岡城附など、その活動範囲には驚くばかりである。通行手形などは所持してなくても、領内はもとより他領間でも何の支障もなく往来していたのである。彼らを支援・援護する仲間の存在とそのネットワークの賜物であった。

領外に放逐された帳外たちが生活していく糧は、主に日雇い稼ぎであった。各地で行われる普請はもとより、岩戸村土呂久などの鉱山など、日雇い稼ぎをする機会は少なからずあったのである。時に

はより良い稼ぎ口を求めて、各地を転々と渡り歩くこともあった。帳外のなかには日雇い稼ぎで貯めた小銭を元手に、海辺の村々で塩肴などを仕入れ、それを山間村々で売ったり、山産物である多葉粉や茶などと「品替」して、今度は海辺村で売るなどの小商いをする者もいた。領内において、山産物と海産物の交換や山・海村々の需要品の調達は、一部の帳外が小商いとして担っていたのである。もっとも、彼らの多くは地道に小商をするより、リスクは高いが手早く生活の糧を得る窃盗や贋札作りに手を出したのである。

領内を追放されて帳外になった者たちが、頻繁に立帰ってくるという問題に対して、藩はその対処法をめぐって御用部屋で議論がなされた。その契機となった事件は、加草村三平が申(文化九年)年冬、親の銀を持ち出して博奕を打ち大負けしたため、負けた分を取り戻そうと「与風悪心」を起こして贋札を拵え、それが露顕して召し捕らえられたという一件である。三平と共に謀した同村房右衛門が捕縛され、両奉行の趣意は首謀者三平が入墨・三日曝し・五〇敲きのうえ領内追払い、房右衛門が領内追払いというものであった。両奉行の趣意を受け御用部屋で議論され、家老達が下した裁定は次の通りである。

近來贋振手形を製御罪当被仰付候もの多、不届至極之段ハ難通候得共、一ツ者手形重の通用より事起り候旁之意味を以、是迄一等充軽キ方ニ被仰付候(中略)三平・房右衛門儀両奉行存念通追払ニ而相当可致候処、追払被仰付候者ハ無宿と成、御他領ニ漂泊シ困窮ニ迫り難営正業、又々悪事いたし、或ハ密ニ御領内ニ立帰姦邪を成、終ニ斬罪にも被行候儀間々有之、御不

仁ニも相当候、然レ共罪之次第時之振合ニ寄、追払ニ無之候而ハ不相成事も可有之候得共、右兩人儀者左之筋ニ無之³⁶⁾

すなわち、領内から追払われた者は他領で「漂泊」し、困窮して正業にもつげず、また悪事に手を染めてしまう。または密かに領内に立廻り、姦邪をして終には斬罪にも処されることになり、「御不仁」であると藩は判断したのである。その結果、領内追払とされた三平は三年牢舎させて親類に預けて居宅永押込・親類以外との面会差止め、房右衛門は一年牢舎の上親類預け・居宅永押込とされた。罪人を帳外にして領外に放逐することで領内の治安を維持することには自ずと限界があったのである。以後、藩は罪の軽重にもよるが、一律に領外に放逐するのではなく、軽罪は一定期間入牢後は共同体内で永押込することにしたのである。

十七世紀後半以降、農村から都市への人口流入が進み、日雇い稼ぎを生業とする都市下層民の増加をみる。犯罪が増大する中で、無宿・帳外などのいわゆる「身分的周縁」の者たちをどう対処するかは、幕藩領主の重要な課題となっていく。

註

- (1) 塚田孝『近世身分制と周縁社会』（東京大学出版会 一九九七年）、吉田伸之『身分的周縁と社会Ⅱ文化構造』（部落問題研究所 二〇〇三年）、久留島浩・高埜利彦・塚田孝・横田冬彦・吉田伸之編シリーズ『近世の身分的周縁』全六巻（吉川弘文館 二〇〇一年）、後藤雅知・齋藤善之・高埜利彦・塚田孝・原直史・森下徹・横田冬彦・吉田伸之編シリーズ『身分的周縁と近世社会』全九巻（吉川弘文館 二〇〇七～〇八）など。
- (2) 塚田孝『身分的周縁論』（『日本歴史』七〇〇号 二〇〇六年）一〇六頁。
- (3) 塚田孝「下層民の世界―「身分的史周縁」の視点から」（朝尾直弘編『日本の近世 第七巻身分と格式』中央公論社 一九九二年）二四八～二四九頁。
- (4) 近年の勘当・久離・帳外の研究については、工藤祐董「欠落・出奔考（一）―江戸藩の事例を中心に―」（『光星学院江戸短期大学研究紀要』第九巻 一九八六年）、辻まゆみ「近世村落と「帳外」」（『史苑（立教大学）』第四九巻第一号 一九八九年）、曾根ひろみ「民衆の罪と責任意識」（ひろたまさき編『日本の近世 16 民衆のころ』中央公論社 一九九四年）、後藤重巳「近世末期における農民動向―特に農村立ち出の無宿をめぐって―」（『大分県地方史』一五三号 一九九四年）、永尾正剛「近世農村「帳外」の条件―小倉藩後期の農村を事例として―」（『北九州市立歴史博物館研究紀要』3 北

九州市立歴史博物館 一九九五年)、坂本忠久『近世江戸の行政と法の世界』(塙書房二〇二一年)など。

(5) 拙稿「近世地域社会における秩序維持策について」(『宮崎公立大学人文学部紀要』第23巻第1号二〇一六年)。

(6) 大石慎三郎校訂 日本史料選書4 近藤出版社 一九八四年) 二二五頁。

(7) 辻前掲(4) 六頁。

(8) 塚田前掲(3) 二四〇頁。

(9) 文化十四年十月十二日「萬覚書」。小倉藩では「出奔帳外」と「追放帳外」があった(前掲(4) 永尾正剛六〇七頁)。

(10) 文化四年五月三日「萬覚書」。

(11) 文化四年七月十一日「萬覚書」。

(12) 文政元年二月四日「萬覚書」。

(13) 文化十年八月六日「萬覚書」。

(14) 文政六年十二月朔日「萬覚書」。

(15) 文政三年十二月五日「萬覚書」。

(16) 小倉藩の場合、帳外処分にする理由として、①農業不精、②内行不相勝、③異見不相用、④出奔、⑤行衛相知不申、⑥他方にて如何体の義仕出候も難計、の七点が挙げられている(永尾前掲(4) 五頁)。

(17) 寛政六年九月朔日「萬覚書」。

(18) 宝暦四年三月十二日「萬覚書」。

(19) 宝暦七年三月五日「萬覚書」。

(20) 宝暦十二年三月十七日「萬覚書」。

(21) 宝暦十二年三月十七日「萬覚書」。

(22) 文化十年六月十六日「萬覚書」。

(23) 寛政二年十月二十六日「萬覚書」。

(24) 文化四年七月廿五日「萬覚書」。

(25) 文化三年八月六日「萬覚書」。

(26) 文化五年十一月廿六日「萬覚書」。

(27) 文化十年八月六日「萬覚書」。

(28) 文化十一年五月十二日「萬覚書」。

(29) 文化十一年十月十二日「萬覚書」。

(30) 文政二年閏四月廿一日「萬覚書」。

(31) 文政二年六月五日「萬覚書」。

(32) 安藤保・大賀郁夫編『街道の日本史53 高千穂と日向街道』(吉川弘文館二〇〇一年) 九一〜九二頁。

(33) 文政二年十一月廿三日「萬覚書」。

(34) 文政二年十一月廿四日「萬覚書」。

(35) 塚田前掲(3) 二三九頁。

(36) 文化十三年六月五日「萬覚書」。

近世延岡藩における「帳外」について（大賀郁夫）